

矢澤達宏著 『ブラジル黒人運動とアフリカ ブラック・ディアスポラが父祖の地に向けてきたまなざし』 (書評)

著者	北森 絵里
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア経済
巻	61
号	4
ページ	73-76
発行年	2020-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00051929

矢澤達宏著

『ブラジル黒人運動とアフリカ——ブラック・ディアスポラが父祖の地に向けてきたまなざし——』

慶應義塾大学出版会 2019年 v +256 ページ

きた もり え り
北 森 絵 里

本書は、ブラジルの黒人運動が「アフリカ」、「黒人性」をどのようにとらえてきたのかを明らかにすることを目的とし、具体的な3つの対象、19世紀にみられたバイアから西アフリカ沿岸部への黒人の「帰還」、1920年代から1930年代にサンパウロで展開した黒人運動とその媒体である黒人新聞、および1960年代後半から1970年代の黒人運動家、アブディアス・ド・ナシメント (Abdias do Nascimento) の思想を分析する。本書に一貫する問題意識は、黒人と「アフリカ」を安易に結びつける前提を再考することである。この問題意識は、ギルロイが『ブラック・アトランティック』[ギルロイ 2006]で提示する課題でもある。ギルロイは、「ブラック・ディアスポラはそのルーツである『アフリカ』を帰還すべき場所として志向する」という前提を疑う必要性を説く。なぜなら、そのような前提に立って黒人と黒人運動をみることは、黒人は「アフリカ」への帰還によらなければ失われた歴史と権利を回復することができないとみなすことであり、彼らが移動させられた先の場所で生き延びながら積み重ねてきた経験、構築してきた歴史、創造してきた文化を否定することになるからである。さらにギルロイは、ブラック・ディアスポラを「黒人性」とだけ結びつけることは本質主義に陥ることだと批判する。著者が述べるように、本書はギルロイが提示した課題に対する1つの応答でもある。さらに著者は、ブラジルの黒人運動において、「アフリカ」はどのように志向されたのかを問うことは、「アフリカ志向」が弱いのはなぜかを問うことでもありとし、ブラジルの黒人運動にみられる「アフリカ」との距離の取り方には、ブ

ラジルという国のナショナル・アイデンティティが深くかかわるという仮説を立てる。

著者は、第1章「19世紀におけるブラジル黒人のアフリカ『帰還』」で、19世紀前半から20世紀初頭にみられた、ブラジルのなかでも黒人人口比が高いバイアからアフリカ西海岸のベニンへの黒人の「帰還」について、データ、先行研究、当時の国内状況に基づいて詳述したうえで、おもに次の4点を指摘する。同時期のブラジルでは、アフリカ出身の黒人とブラジル出身の黒人がともに存在していたが、①ブラジル出身黒人の間では「帰還」願望はさほど強くはなく、アフリカ出身黒人の「帰還」先は出身地と一致することが多かった。②「帰還」は自発的意思・費用自己負担によるものだった。③「帰還」先でブラジル人コミュニティが築かれた。④ブラジルと「帰還」先との間では往復がみられた。このような、ブラジルの事例の特徴は、同時期の米国黒人によるリベリア入植との比較によっていっそう際立つ。著者は、社会で搾取される黒人が解放を求めて故郷へ「帰還」するというイメージ、すなわちブラック・ディアスポラと「アフリカ」との絆を強調することには慎重であるべきだとする。ブラジル黒人にも「アフリカ」への「望郷の念」はあっただろうが、それだけをもってブラジル黒人の「帰還」の事例を読み解くべきではない。そこには多様な「アフリカ」観があったはずである。当時のバイアの黒人にとって、「アフリカ」は、「今いる場所」とかけ離れた「救済の場」、過酷な現実からの逃避先、理想の地「アフリカ」というより、バイアと連続性をもつ具体的な場所としての「アフリカ」だったのではないか。アフリカに「帰還」した者もブラジルと往復していた者も、彼らの帰属意識はブラジルにあったのではないか。このように、著者は、ブラジル黒人の「アフリカ帰還」を安直に「望郷の念」と結びつけ単純化することなく、その多様性を提示する。そしてこのことは、英語圏中心主義的なブラック・ディアスポラ研究への批判にもつながるのである。

第2章「20世紀前半のサンパウロにおける黒人運動の性格と動態」、第3章「20世紀前半の黒人新聞のなかのアフリカとブラック・ディアスポラ」および第4章「20世紀前半の黒人新聞の言説にみる人種とネイション」において、著者は1920年代から1930年代のサンパウロで展開した黒人運動の隆

盛期に発行された黒人新聞記事や中心的人物の回顧録・回想集および先行研究を渉猟し、当時の黒人運動の流れと活動家たちの動向・関係性を追っている。20世紀初頭の黒人運動にとって、サンパウロ州および都市サンパウロの状況は重要である。サンパウロは当時、工業化が進み経済の中心であった。また、ヨーロッパからの移民が多数流入し、白人の人口比が高かった。同時に、サンパウロとリオデジャネイロを中心として、近代化のもう1つの側面であるナショナル・アイデンティティの形成が進んでいた。それは、支配層によって創られた、「(人種による差別が存在しない：評者註)「人種民主主義」や混血が生みだしたブラジル人といったイデオロギー」(150ページ)である。当時の支配層は、近代化によってヨーロッパと肩を並べる国家を目指すと同時に、「混血性」をブラジルの真正性とすることによって文化的に「脱ヨーロッパ」を図った。支配層は、黒人をブラジルの近代化を阻害する要因と同一視する一方、黒人とその文化は「混血性」の一要素として重要視した。

このような黒人をめぐる矛盾が内包されたまま近代化が進められ、経済的に豊かな少数の黒人中間層と圧倒的多数の貧しい黒人(以下、大衆黒人とする)といった黒人間の多様化も出現するなかにおいて、当時の黒人新聞の作り手と読者は識字者である中間層だった。著者によれば、当時の黒人新聞にみられる言論において、「アフリカ志向」や「黒人性」の前景化は弱かった。その理由は次のように分析される。従属的地位にある黒人は、近代化の恩恵から排除されるにもかかわらず、近代化にともなって白人支配層が創った社会に参入しなければならない。したがって、黒人もまた、「混血性」というナショナル・アイデンティティを受容せざるを得ず、「アフリカ志向」や「黒人性」の賞賛といった考え方が、「混血性」というイデオロギーと相容れないことを理解していた。だが同時に、当時の黒人運動は、国外の黒人運動の動向に言及することによって、黒人の自由を目指し、人種偏見・差別に対して抗議するために黒人の団結を呼びかけた。このように、20世紀初頭のブラジルの黒人運動は、「アフリカ志向」や「黒人性」を強く主張することを意図的に回避し、「混血イデオロギー」を批判せず受容しながら、人種主義を告発し黒人の境遇の改善を目指すという戦略を

取った、と著者は分析している。「混血」と「人種民主主義」の国としてのブラジルは理想的な国のあり方であり、だからこそ現実には起きている黒人に対する搾取と差別をその理想からの「逸脱」であると訴えたのだ。

第5章「ブラック・アトランティックのなかのブラジル」で扱われるのは、1960年代から1970年代の黒人運動活動家、アブディアス・ド・ナシメント(以下、本書に倣ってアブディアスとする)の思想である。アブディアスは、「アフリカ志向」を前景化し、「混血イデオロギー」を批判する。かつ、その思想には当時の国外の黒人運動(ネグリチュード、パンアフリカ主義)との繋がりがみられ、黒人に対する人種主義が告発される。著者によれば、アブディアスの思想の主要な点は4つある。①ブラジル黒人は国家の中心的存在である、②アフリカの友愛・協同に基づく社会変革と解放がなされるべきである、③ヨーロッパ中心的な科学および知識人が、黒人に対する搾取・抑圧と共犯関係にあると批判する、④ヨーロッパ的価値に代わる黒人・アフリカの価値を模索する。さらに、著者が指摘するのは、アブディアスはブラジル国内に存在するアフリカ系ブラジル文化に意義を見出さなかったことである。アブディアスによれば、アフリカ系ブラジル文化は、アフリカルーツの文化と支配者の文化すなわちヨーロッパ文化との「混血の文化」であり、それに価値を見出すことは白人支配層にとって都合のよい枠組みを受容することを意味する。そのため、希求されるべきは、「混血しない」黒人性であり「アフリカ」的価値なのである。

本書に示された3つの事例を通して指摘される問題について、評者は、ブラジル社会が「人種」という現在進行形の問題を議論するときに必ず浮上する課題と、ブラジルの黒人運動が抱える根本的問題が提示されていると考える。1つは、黒人運動における主体と客体の問題と、黒人の連帯・意識化の難しさである。黒人運動において、黒人はつねに「語られる」存在である。アブディアスの思想にみられる、ヨーロッパ中心的・白人中心的価値が黒人の搾取・抑圧を正当化する枠組みであるとする批判は、ヨーロッパに向けられていただけではない。それは、ブラジル国内の知識人にも向けられていたと考えられる。ブラジルの支配層・知識人は、ヨーロッパに対

してヨーロッパ中心主義を批判し、国内の被支配層とその文化的実践をブラジルの特殊性として「脱ヨーロッパ」のために利用した。ところが、支配層・知識人は国内において、ヨーロッパ中心的価値を前提として被支配層とその文化的実践について論じる特権をもつ。ここで問題視されるのは、単に「主体としての白人支配層が黒人について語る」というだけではない。主体としての黒人知識人が、客体としての大衆黒人について語るという図式である。つまり、もっとも搾取される大衆黒人は「語られる存在」であり、その大衆黒人が主体となる黒人運動とはどのようなものかという課題は、ブラジルの黒人運動が抱える、黒人の連帯と意識化の問題に通底すると言えよう。それは、黒人運動家・知識人の言論がどの程度大衆黒人に受け入れられ、それによって黒人の意識化や連帯はどれほど促されたのだろうか、という問題である（この点は後に再度考えたい）。

本書が指摘するもう1つの問題は、黒人による「混血イデオロギー」受容である。評者はこの問題を、従属的地位におかれた者が圧倒的に権力を有する相手と闘うには、同じ土俵に上がって相手の論理を受容するしかないのか、という課題として受け止めた。1960年代から1970年代でもなお、「黒人性」を主張することは人種主義への加担とみなされた。黒人にとってブラジル社会は、生きる現場、自分たちの生活・人生・歴史・文化を創造する場であり、拒絶の対象ではない。しかし、その場が白人支配層にとって都合のよい「混血イデオロギー」の場である限り、混血しない「黒人性」や「アフリカ」を主張することは「逸脱」として排除される。では、「混血イデオロギー」を否定し「黒人性」を主張することは「反混血イデオロギー」となり得るのか。結局、それは二項対立を逆転させただけであり、黒人が異議申し立ての対象とする人種主義に与することに陥る。この課題についてギルロイは次のように述べる。「ナショナル・アイデンティティの主張と、それとは異なる主体のあり方や自己同一性」という課題は、「ディアスポラの黒人の抱える根本的な二律背反を指し示す。この（意識の）二重性は、（黒人たちが）西洋の内部と外部に同時に存在していることから生じる（中略）このことがどれほど、人種の抑圧に抵抗し黒人の自律性に向かう政治運動の実行に影響をおよぼしているのか」[ギルロイ 2006, 65]。

さらに、評者は黒人による「混血イデオロギー」受容の、もう1つの側面を考えたい。黒人による「混血イデオロギー」受容は従属的地位を生きるための戦略だけなのだろうか。それだけではなく、ブラジル社会は現実的に「混血」の人びとによって構成される社会だからではないかとも考えられる。言い換えるならば、人びとの肌の色は黒色から褐色を経て白色までグラデーションに富んでおり、褐色といってもより黒い褐色からより白い褐色まで連続的である。そのような状況において、「黒人」とはいったい誰なのか。「黒人」という集団が明確に区切られない社会において、「黒人運動」に自己同一性を見出すことのできる「黒人」とは誰なのか。その意味において、20世紀初頭にまとまった形で「黒人運動」が生まれたのがサンパウロだったことには首肯できる。黒人人口比が高いバイアヤ、黒人より混血者が多数を占めるリオデジャネイロでは、黒人が集団として従属的地位におかれているという意識を共有しにくい。とくに、リオデジャネイロでは、「混血の文化」のなかに黒人やアフリカルーツの文化は継承されているという考えが主流であったと考えられる。一方、先述した通り、サンパウロ（州・市）は、経済が発展し白人人口比が高いために、黒人は、白人支配層との対比のなかで経済的不平等と従属的な地位を、集団として意識しやすかったのではないだろうか。

著者も指摘しているが、本書ではアブディアスの思想においてみられた「アフリカ志向」への転換が大衆黒人の間に浸透しなかった要因は十分に議論されていない。著者が述べるように、その要因には、1964年以降1985年までブラジルが軍事政権下にあったため表現の自由がなかったことと、アブディアスの反骨心旺盛な個人的資質が関係したことは確かであろう。しかし、評者はそれだけではないと考える。なぜなら、1970年代末以降、ブラジル各地において、アブディアスの思想をベースとする言説がさまざまな音楽文化のなかに見出されるからである。ここでいう音楽文化とは、歌詞、メロディーおよびリズムといった狭義の音楽だけではなく、ダンスや「（音楽が演奏され共有される）場」も含めた音楽にかかわるあらゆる要素が一体となった現象であり、ギルロイが「表現文化」と呼ぶものである。「表現文化」とは、先述したような本質主義か同化主義

かといった二者択一を越える、政治性をもった黒人による主体的な自己表現である。ブラジル各地でみられる、黒人による「表現文化」において注目されるべきことは、非言語的側面の重要性である。

ここで、評者は「黒人は非言語的である」などというつもりはない。黒人の表現文化においては、歌詞やミュージシャンによる言論のなかで「黒人性」、「アフリカ志向」、「反人種主義」といった言説が強く主張されるのだが、それと同じくらい重要視されるのが、リズム、グループ、サウンド、ダンス、それらが送り手と受け手によって共有される「場」である。いってみれば、黒人の「表現文化」においては、言説は非言語的・身体的な要素をともなってはじめて共有され完結する。アブディアスの思想が大衆黒人に浸透しなかった理由は、表現方法が言語に偏っていたことにもあるのではないか。そして今日、黒人による「表現文化」は、従属的な地位におかれる、あらゆる肌の色の人びとによっても支持されている。黒人の「表現文化」が提起する問題が黒人以外の人びとによって共感されるということは、黒人の境遇が黒人に限定されず、他の肌の色の人びとに

よっても共有され議論されるべき問題として認識されることを意味する。だが、ここで再び問題が生じる。黒人の「表現文化」によって提起される問題が「黒人に限定されない」となると、黒人が黒人だからこそ直面してきた問題が不問にされる。ブラジル社会では、「黒人」という集団を明確にする境界線が曖昧であるにもかかわらず、同じ境遇であってもより黒い肌の色の持ち主ほどその厳しが増す。そのような社会において「黒人運動」を展開することの難しさを、本書はあらためてわれわれに突きつけるのである。

文献リスト

ギルロイ、ポール 2006. 上野俊哉・毛利嘉孝・鈴木慎一郎訳『ブラック・アトランティック——近代性と二重意識——』月曜社。

(天理大学国際学部教授)